

練習問題の解答例

福島孝治 (東大院総合文化)

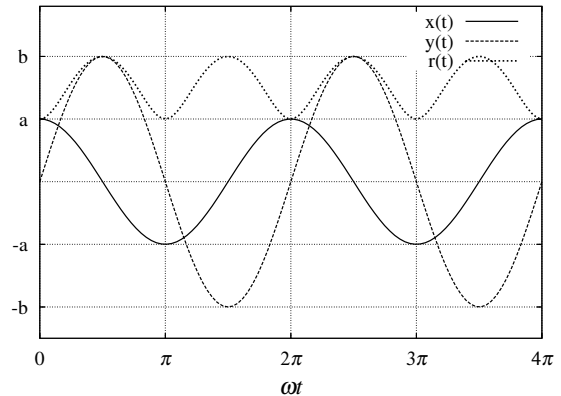
ver. 1.0: 2005. 5. 2

ver. 1.2: 2005. 5. 6

ver. 1.3: 2005. 5.14, ver. 1.4: 2005. 5. 16

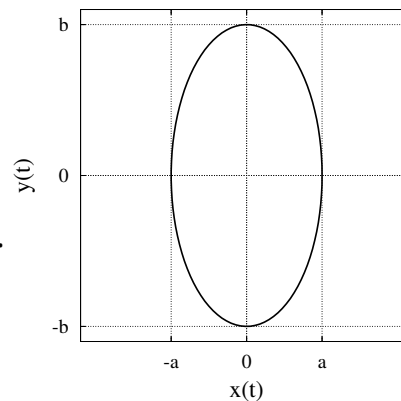
問 1.1-1

z 成分はなので，運動は xy 平面内で起こっている．時間の関数として， x 座標， y 座標をグラフに示してみる．横軸は ω を単位にとり，未定の定数 (a, b) は適当に設定することにした．



問 1.1-2

今度は，時間を媒介変数として， xy 平面上に描いてみる．上のグラフから，時々刻々の点を繋げてみると，右のように楕円になる．

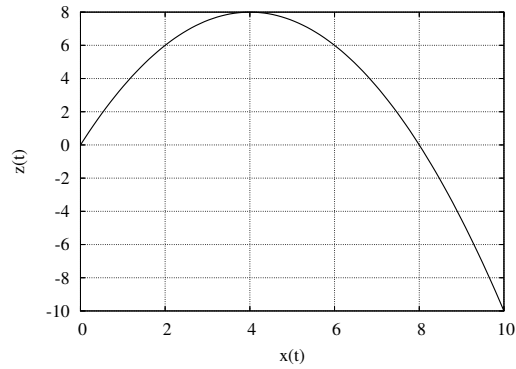
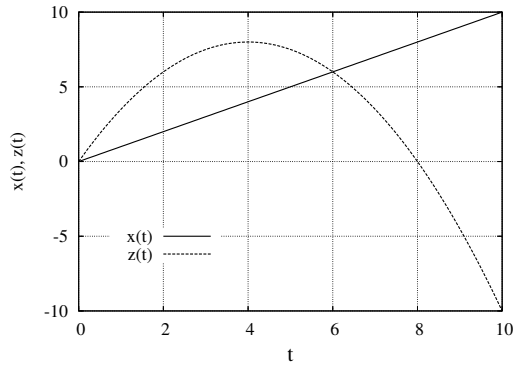


問 1.1-3 原点からの距離を $r(t)$ とすれば，

$$r(t) = \left(a^2 \cos^2(\omega t) + b^2 \sin^2(\omega t) \right)^{1/2} = \left(a^2 + (b^2 - a^2) \sin^2(\omega t) \right)^{1/2}$$

となることがわかる．これは a と b の間を振動する関数である．問 1-1-1 のグラフに $r(t)$ の結果も載せておいた．この関数の周期は $x(t)$ や $y(t)$ とは異なっていることは確認しておこう．

問 1.1-4 問題文では x ，と y を書くことになっていたが，正しくは y ではなくて， z 座標である．上で行ったようなグラフを描いてみる．但し，ここでは， $a = 1.$, $b = 4.$, $g = 1.$ とした．



どのような運動かが想像できるだろうか。

問 1.2-1 微分に関する以下の恒等式を示せ。

$$1. \quad \frac{d}{dx} x^n = \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \frac{(x+\epsilon)^n - x^n}{\epsilon} = nx^{n-1}$$

(ここで、二項定理 $(x + \epsilon)^n = x^n + {}_n C_1 x^{n-1} \epsilon + {}_n C_2 x^{n-2} \epsilon^2 + \dots$ を用いた.)

2. (微分の合成則)

$$\begin{aligned} \frac{d}{dx} (f(x)g(x)) &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \frac{f(x+\epsilon)g(x+\epsilon) - f(x)g(x)}{\epsilon} \\ &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \left(\frac{f(x+\epsilon)g(x+\epsilon) - f(x)g(x+\epsilon)}{\epsilon} + \frac{f(x)g(x+\epsilon) - f(x)g(x)}{\epsilon} \right) \\ &= \left(\frac{d}{dx} f(x) \right) g(x) + f(x) \left(\frac{d}{dx} g(x) \right) \end{aligned}$$

$$3. \quad y'(x) = (x^n)' \frac{1}{x+1} + x^n \left(\frac{1}{x+1} \right)' = \frac{nx^{n-1}}{1+x} + x^n \frac{(-1)}{(1+x)^2} = \frac{nx^{n-1} + x^n(n-1)}{(1+x)^2}$$

4. 上の微分の合成則を n 回微分に一般化すると、

$$\frac{d^n}{dx^n} (fg) = \sum_{m=0}^n {}_n C_m f^{(n-m)} g^{(m)}$$

となる。ここで $f^{(m)}$ は f の x についての m 回微分を、 ${}_n C_m$ はコンビネーションを表す。 $f(x) = x^n$, $g(x) = (1+x)^{-1}$ とすると、

$$\frac{d^n}{dx^n} \frac{x^n}{1+x} = \sum_{m=0}^n {}_n C_m \frac{n!}{1+x} \left(\frac{-x}{1+x} \right)^m = \frac{n!}{1+x} \left(1 - \frac{x}{1+x} \right)^n = \frac{n!}{(1+x)^{n+1}}$$

途中で任意の n に対して、二項定理 $(x+y)^n = \sum_{m=0}^n {}_n C_m x^m y^{n-m}$ を使っている。

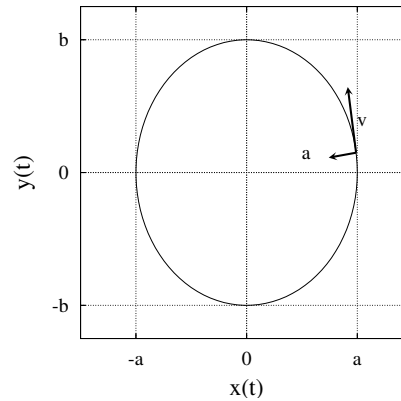
問 1.2-2

$$\mathbf{v} = (-a\omega \sin(\omega t), b\omega \cos(\omega t), 0)$$

問 1.3-1

$$\mathbf{a} = (-a\omega^2 \cos(\omega t), -b\omega^2 \sin(\omega t), 0)$$

ある時刻の \mathbf{v} と \mathbf{a} を右図に示しておく。



問 1.3-2

$$\mathbf{v} \cdot \mathbf{a} = a^2\omega^3 \sin(\omega t) \cos(\omega t) - b^2\omega^3 \sin(\omega t) \cos(\omega t) = (a^2 - b^2)\omega^3 \sin(\omega t) \cos(\omega t)$$

となる。加速度ベクトルは常に原点を向いていて、速度ベクトルは楕円の接線方向を向いている。 $a = b$ の場合 (円運動) は常にゼロになるので、速度と加速度は直交しているが、 $a \neq b$ の場合は二倍周期で振動する。

問 1.4-1 講義で説明したように、長さとお時間の次元をそれぞれ L, T とすると、[速度] = L/T , [加速度] = L/T^2 となる。

問 1.4-2 左辺と右辺の次元を勘定することにより、

$$[a] = L, \quad [b] = L/T, \quad [c] = L/T^2$$

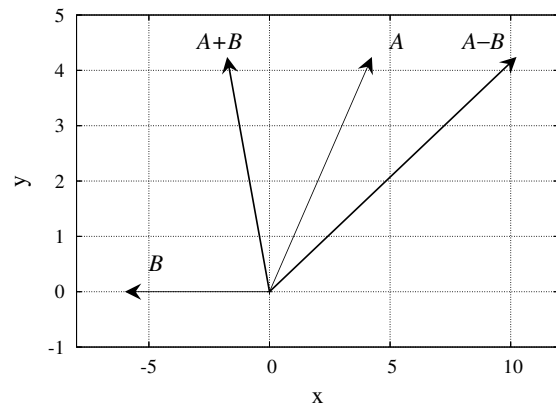
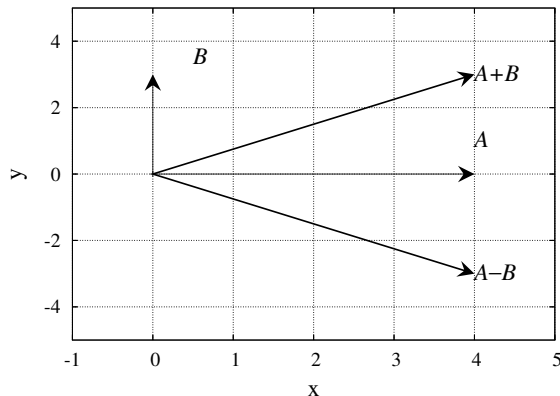
となることがわかる。例えば、位置が時間の関数として与えられたときに、それぞれの時間のべき関数の係数は、長さ、速度、加速度の次元を持つ。

問 1.5-1

ベクトルの大きさは、共に 5。

問 1.5-2

ベクトル A は $A = (3\sqrt{2}, 3\sqrt{2}, 0)$ であり、ベクトル B は $B = (-6, 0, 0)$ 。大きさはそれぞれ $|A + B| = 6(2 - \sqrt{2})^{1/2}$, $|A - B| = 6(2 + \sqrt{2})^{1/2}$ 。



問 1.5-3 3つのベクトルが与えられている． $\mathbf{A} = (2, 3, -4)$, $\mathbf{B} = (2, -2, 2)$, $\mathbf{C} = (-1, 2, 1)$ ．

1. ベクトル \mathbf{B} の大きさは, $|\mathbf{B}| = \sqrt{3 \times 2^2} = 2\sqrt{3}$ なので, 単位ベクトルは,
 $\frac{\mathbf{B}}{|\mathbf{B}|} = \left(\frac{1}{\sqrt{3}}, -\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{1}{\sqrt{3}}\right)$
2. $\mathbf{D} = (4, 1, -2)$, $\mathbf{E} = (2, 8, -10)$ なので, $\mathbf{D} \cdot \mathbf{E} = 8 + 8 + 20 = 36$.
3. \mathbf{D} と \mathbf{E} の外積を求める． $\mathbf{D} \times \mathbf{E} = (-10 + 16, -12 + 40, 32 - 6) = (6, 28, 26)$.
4. $\mathbf{A} \cdot \mathbf{B} \times \mathbf{C} = (2, 3, -4) \cdot (-6, -4, 2) = -32$.